

—またぞろ昆虫に興味—

(記・写真 岡本)

この歳になって、またぞろ昆虫に興味を持ち始めた。その切っ掛けは、孫の虫捕りの対象がダンゴムシに飽きて蟬、カブトムシ、バッタなどの昆虫に変わったことである。昆虫捕りなら昔とった杵柄ではないが、捕り方を伝授してやれるぞという眠っていた「稚氣」が澎湃として蘇ってきたのだ。孫と近くの小金井公園で昆虫捕りをした。昆虫への接近の仕方や捕虫網の使い方の手本を見せながら教えた。孫が幹に網を近づけると、偶々蟬の方から網に飛び込んできて捕れた。孫にとって自力による初の蟬捕獲である。孫の嬉々とした表情、それは爺さん冥利に尽きるものだった。

子供に人気のある虫捕りは、昆虫綱のコウチュウ目(鞘翅目)、バッタ目(直翅目)、トンボ目(蜻蛉目)、チョウ・ガ目(鱗翅目)などの昆虫だ。学校の理科で昆虫はどんな虫か教わった。外骨格に守られた頭部、胸部、腹部に分かれ、胸部から三対(6本)の脚と二対(4枚)の翅(痕跡のみもある)が生え、幼虫から脱皮、羽化の変態をして成虫(完全変態は蛹から、不完全変態は幼虫から成虫)になるという特徴をもつと習った。昆虫は見つかっているだけで100万種以上で、全生物の約6割である。昆虫の中で最多はコウチュウ目で約35万種、地球上で最も「種数」が多いグループという。次にチョウ・ガ目(約16万種)、ハチ目(約15万種)、ハエ目(約15万種)の順で、コウチュウ目は昆虫綱の8割を占める。トンボ目(約6000種)、バッタ目(約2200種)、カマキリ目(約2300種)などは分類上劣位にある。昆虫は地球上のどこにでも棲んでおり、唯一棲んでないところは、海中だけという(海上には海アメンボが棲む)。我が国には昆虫は約3万2000種が棲む。

自分は終戦前年の生まれ、団塊世代(1947年～1949年生まれ)の前の焼け跡世代(幼年期と少年期を大戦中に過ごした世代で1935年～1946年生まれ)である。子供の頃、大阪市内の都会にもまだ空き地がふんだんにあった。到るところに草っ原や田畑があった。戦争の残滓である爆弾池(爆弾跡に雨水が溜まってできた池)が幾つか残っていた。家の近くに小魚、ザリガニ、種々の虫が棲息していて、それらを捕るのが遊びであった。小学校に上ると夏休みの課題として昆虫採集が出されて、蓋付のYシャツ紙箱を標本箱にしたのを覚えている。戦後の復興が進むなかで、近所にあった生き物の棲息地は、新設高校、市営住宅などが立って住宅街となってしまう、中学生に入る頃には消えていった。都会の子供で近くの草っ原で虫捕りができたのは、地域にもよるが概していつ頃までだったのだろう。団塊世代までだったろうか。東京では1964年のオリンピックを契機に高速道路拡充、高層ビル建設、河川の埋立が一挙に進んだ。それに伴い、虫の棲息地が激減、虫は棲む環境には相応しくない都市公園に追い詰められた。虫捕りは子供の普通の遊びではなくなっていった。

山好きを山屋というように、虫好きが昂じて大人になっても虫捕り、昆虫標本造りの趣味に没入している者を「虫屋」と称している。この虫屋が最近めっきり減ってきているという。焼け跡世代では10人中8人は虫捕りを楽しんでいたのではないか。そんな世代でも虫屋になる者は少なかった。虫屋になるのを阻害する要因は幾つかある。受験勉強を強いられること、虫で食っていけるのかと詰問されること、就職して仕事に没頭せざるを得なくなること、結婚した後は虫と私とどちらが好きなのかと迫られることなどで、これらの関所を無難に通り切るのは難しい。

関所を通過された著名人の虫屋にどんな方がおられるのだろうか。養老孟司(解剖学者、「バカの壁」の著者、1937年生)、鳩山邦夫(大臣歴任、1948年生、67歳没)、福井謙一(ノーベル賞科学者、1918年生、79歳没)、北杜夫(小説家、精神科医、「どくとるマンボウ昆虫記」著者、1927年生、84歳没)、奥本大三郎(仏文学者、ファーブル昆虫館館長、1944年生)、池田清彦(構造主義生物学者、1947年生)、村田泰隆(村田製作所社長、1947年生、71歳没)、若いところでは、やくみつる(漫画家、日本昆虫協会副会長、1959年生)、香川照之(歌舞伎役者、1965年生)、さらに各界の著者がおられるが、ほどほどにしておきたい。ここに挙げた大方の虫屋はやく、香川を除き焼け跡世代から団塊世代頃に生まれた方々である。



ダイコクコガネ

虫屋という言葉もなかったであろう明治、大正、昭和初めの世代で著名な文学者の虫好きを紹介する。小泉八雲(1850年～1904年)、志賀直哉(1883年～1971年)、室生犀星(1889年～1962年)、広津和郎(1901年～1968年)などである。我が国の昆虫文学を語るとき、八雲は避けて通れず作品の質量とも抜きん出ているという。「セミ」「トンボ」など虫の名前の作品や「虫の楽士」が評価が高く、またハエや蚊も払うだけで叩くことはなかった。志賀直哉は虫を扱ったものとして

「城の崎にて」、「豊年虫」などがあり、「城の崎にて」では「虎斑の大きな肥った蜂」について愛情あふれる描写をしている。室生犀星は鳴く虫がとりわけ好きで「虫寺抄」で秋の虫が登場する。蝉などの虫を題材にした詩も多い。広津和郎は幼い頃からファーブル昆虫記の愛読者で「あおまつむし」など虫の作品がある。この時代の文学者の日常周辺には虫が普通に棲息していたので、虫を主題にしたり、虫を登場させた作品が多い。虫と疎遠になりつつある昨今、虫を主題又は描写した作品を発表している小説家にどんな方がおられるのだろうか。

(了)

参考図書

「虫の文化誌」小西正泰著、昭和52年朝日新聞者刊

「昆虫少年記」梶原精一著、1996年朝日新聞社刊

「観察する目が変わる昆虫学入門」野村昌史著、2013年ベレ出版社刊

「三人寄れば虫の知恵」養老・奥本・池田の鼎談、平成13年新潮社刊